

五念五正の關係

小 島 叡 成

一

淨土教の實踐法として特に注目せらる可きは、天親の五念門と善導の五正行なる事は何人も異論無き所であらう。爾らば此の兩者の間には如何なる内面的關係が存するのであらうか、今これについて聯か考察の歩を進め度いと思ふのである。蓋し此の問題については既に諸先哲請先輩の幾多貴重なる研究の存する所にして、敢て餘輩の論及す可き餘地無き處かも知れない。従つて此所には幾分立場を變えて、これを安心起行の兩面觀より五念五正の内面的關係を論述してみたいと思ふのである。即ち天親の五念門は當然論主の一心との關係に於いて論議せらる可きものであり、又善導の五正行は觀經三心との關係に於いて考察せらる可きものなる事は言を俟たない所であらう。然るに善導の禮讚所引の五念門はこれが觀經三心との關係に於いて論述せられてゐるのであつて、即ちこゝに禮讚所引の五念門を媒介として天親の五念門より善導の五正行への展開過程が微妙なる問題を内在する事が窺知せられるのであつて、斯かる觀點より茲に駄文を連ねて江湖の叱正を仰がんとするものである。

先づ天親の五念門についてこれを考察するに、これが論主の一心たる安心に對して、始めて五念行としての存在價值が認められるのであつて、古來淨土論一部は偈頌に一心を長行に五念を説述するものであり、而もその五念は一心の具徳流出であるとせられてゐる。即ちこれは既に長行初めに「云何が觀じ云何が信心を生ずる若し善男子善女人五念門行を修して行成就し畢竟じて安樂國土に生じ彼の阿彌陀佛を見たてまつるを得何等か五念門なる一者禮拜門二者讚歎門三者作願門四者觀察門五者廻向門なり」とある文に依つても窺知せられる所であるが、更にそれを明確ならしめたものは曇鸞の論註の所明である。即ち論註では一心偈を五念門に配釋して、歸命は禮拜、盡十方無碍光如來は讚歎、願生安樂國は作願、觀彼世界相等は觀察、我作論說偈以下を廻向門と見て、此所に五念の根源を一心偈の内に位置づけられてゐるのである。斯くて五念は全く一心の安心より起る起行相なる事が明確にせられたのであつた。殊に讚嘆門の下には三不三信の釋を設けて行の如實を信の上に需められてゐるのであつて、宗祖もこれを一如實修行相應は信心一つにさだめたり」と讚ぜられし所である。されば一心五念は全く相ひ離れたものではなく不即不離の關係に於いて論究せらる可きものなる事が明らかとなつたのである。

然らば此の一心五念は何を根據として施設せられしものなるやと云ふに、古來五念門の施設についてはこれを左の如く

- (1) 大經中心――十八願（三心・十念）
――三願（十八願・十二願・二十二願）
- (2) 觀經中心

(3) 小經中心

(4) 三經通申

(5) 淨土諸經

等諸説ある所であるが、今これを一心五念一具として考ふる場合は何としても大經十八願の三心十念をその根底と觀るのが最も妥當とせられる所である。

蓋し一應これを卒爾に見る時は既に經題に「無量壽經優婆塞願生偈」とあり、又偈頌の終りに（一）も「無量壽經修多羅章句我れ偈誦を以て摠説竟る」とある如く無量壽經によられし事は明らかにして、これを論註には「無量壽（二）は是れ安樂淨土の如來の別號なり釋迦牟尼佛王舍城及び舍衛國に在して大衆の中に於いて無量壽佛の莊嚴功德を説きたまふ即ち佛の名號を以て經の體と爲す偈に聖者婆藪槃頭菩薩如來大悲之教を服膺して經に傍へて願生偈を作れり」と述べ總じては三經によられし旨を明されてゐる。されば淨土論を三經通申論とも呼稱せられる所であるが、而も論註上卷終りの八（三）番問答に十七・十八二願成就文を連引し往生の正因信心にある旨を暗示して卷頭の易行道の信佛因緣使得往生と對應せしめられし點、及び下卷終り要本釋に十八・十一・二十二の三願を的證して修五門行の速得成就無上菩提を論證するについて「十念々佛使得往生」と全く論の修五門行を本願の乃至十念に置き換へてゐられる點等よりすれば、三經中特に大經、就中十八願の三心十念を中心とせられし事が推知せられるのである。

此の註主の意を更に明確にせられたのが我が宗祖聖人にして、即ち曇鸞（四）讚に「天親菩薩のみことをも鸞師とよむべたまはずば他力廣大威徳の心行いかでかさとらまし」と讚じ、又「これらの廻向によりてこそ心行ともにえしむなれ」と一心五行を出し、次に「彌陀（五）の方便ときいたり悲願の信行えしむれば」と叙べて信行即ち三信十念が、心行即ち一心五行なる旨を明してゐられる。又銘文には「世親菩薩彌陀の本願を釋したまへる御ことを論といふなり」と明示せ

られてゐるのである。特に御本書信卷三一問答に本願の三心と論主の一心の一異を論ずるについて第一問答では至心と欲生を中間の信樂に納めて信樂即一心とせられてゐる。これ註主が三不信を論ずるに淳・一・相續の三心を中間の一心に納めてこれを論主の一心に同致せしめられしと同じ筆格である。又第二問答では三心は至徳の尊號を體とすと本願の三心を尊號に結歸せられてゐるのであるが、これも三在釋の在心釋に「此の十念は無上の信心を依止し阿彌陀如來の方便莊嚴眞實清淨無量功德の名號に依つて生ず」の文意に通ずるものであると考へられるのである。

斯く論註、宗祖を通じて概觀するとき一應五念行は一心の具德流出としての起行相なる事、又それは本願の三心十念の念佛を開いて五念とせられしものなる事が推知せられるのであるが、而も此所に説示せられし五念門なるものは論の所明から見るときは作願、觀察の奢摩多・毗婆舍那の止觀を中心とした三類九法といふが如き高遠なる菩薩行として説示せられてゐるのであつて到底凡愚の實修を許さぬ所のものである。即ち一論の體制から見ると偈頌の始めに「世尊我れ一心に盡十方無碍光如來に歸命したてまつり安樂國に生ぜんと願ず」と曰ひ、又長行の始めに「此の願偈¹⁵は何の義を明す彼の安樂世界を觀じて阿彌陀佛を見たてまつり彼の國に生ぜんと願ずることを示現するが故に」とある如く一心願生乃至觀見願生が中心にして、その一心願生は修五門行に依ると明すのであるから五念門の中心が作願、觀察にある事は當然とせられる所である。而して今此の五念門は前四門は自利、第五門は利他の行にして全く二利圓滿の菩薩道として説示せられし所である。然るにこれを凡夫相應の實踐法として味得せられたのが曇鸞の論註の所明にして、即ちこれを一心の具德流出とし而も此の五門中作願・觀察の止觀、及び利他行たる廻向の重要な三門を彼此二土に通ずる行とし、更にそれが佛力他力により惠まるゝものなる點を提示して有名なる他利々他深義釋を施し¹⁷「佛力に非ずば四十八願便ち是れ徒らに設けたまへり」と是れを大經の本願の上に論證せられてゐるのである。されば宗祖は「天親菩薩のみことをも鸞師とよみのべたまはずば他力廣大威徳の心行いかでかさとらまし」と讃ぜられし所

であり、更にこれを徹底して宗祖は二門偈に五念行の一々を法藏菩薩所修の行なる旨を明示せられてゐるのであつて、こゝに五念行が全く凡夫相應の實踐法としての意義を持つ事となつたのである。

三

然らば次に此の天親の五念門が善導の五正行と如何に交渉せらるゝやと云ふに、それについては先づ善導が天親の五念門を如何に相承せられしやを一考しなければならない。即ち善導は禮讚⁽¹⁸⁾に天親の五念門を引用せられてゐるのであるがその引用の體裁に大いに趣きを異にする點が指摘せられるのである。元來こゝに天親の五念門を引用するは何が爲めなりやと云ふに、これは禮讚に安心・起行・作業の方規を定むるに當り觀經の三心と天親の五念門と攝大乘論の四修とをこれに配して引用せられたのであつて、即ち觀經三心の安心に對し起行として天親の五念門を引用されてゐるのであつて、前述の淨土論に於ける一心五念の關係と全く旨趣を異にする點が了知せられるのである。即ち一心五念が大經十八願の三心十念に淵源するとの註並びに宗祖の指南によれば、今はこれが觀經三心との關係に於いて引用せられてゐるのであつて此所に善導獨自の引意がみられるのである。従つて同じ五念門を引用するについても禮讚では作願と觀察を轉置して觀察を意業憶念觀察門と呼稱し、これを禮拜・讚嘆・憶念觀察と次第の如く身口意の三業に配して、此の三を至誠心の所修とし、又作願・廻向の二はこれを廻向發願心の所修とせられてゐるのである。即ちこれは前の三心釋に於いて、先づ至誠心について「一者至誠心所謂身業に彼の佛を禮拜す口業に彼の佛を讚嘆し稱揚す意業に彼の佛を專念し觀察す凡そ三業に必らず眞實を須るが故に至誠心と名づく」とあり、又廻向發願心について「三者廻向發願心所作の一切の善根悉く皆廻して往生を願す故に廻向發願心と名づく」とあるによつて明らかである。而して此所には同じ讚嘆門を引くについて特に「稱無碍光如來名」の略讚を全く省略せられてゐるのであつて

これ先の三心釋に深心を釋して「今彌陀の本弘誓願は名號を稱して下至十聲一聲等に及ぶまで定んで往生を得しむと信知して乃至一念疑心有ることなき故に深心と名づく」とある「稱名號」に相當するものにして、今これを略せられしは稱名の一行を深心の所修として別立する意圖の存するものなる事が推知せられるのである。即ちこれが聽て散善義深心釋に於いて五正行の施設となり稱名正定業の創見となつて顯彰せられる事となつたものと考へられるのである。斯くの如く五念門を至誠心・廻向發願心の所修とし稱名の一行を深心の所修として別立せられし事實は、そこに五念門より五正行への展開過程を想はしめられるのであつて、斯くてこれが散善義の深心釋に五正行を説示するについて先づ沒せられた稱名が獨立せられて正定業の位置を占め、他の讀誦・觀察・禮拜・讚歎供養の前三後一が助業として説示せられる事となつたのを知るのである。

斯くの如く善導にあつては同じ天親の五念門を引用し乍らも作願・觀察を轉置して止觀中心の菩薩行としての五念門の體系を全く打破し、而も作願は次の廻向と共に廻向發願心の所修と見て此所に自利々他圓滿の菩薩道の方軌を打破して、これを全く願生行者の發願廻向と一具の行法とみられたのである。斯く止觀の體系を解消し、更に利他の廻向を沒却する事により菩薩道としての五念門が全く凡夫相應の實踐法として轉化せられる事となつたのである。

四

次に將しく五正行について考察するに、即ち散善義深信釋の就行立信の下に「正行と言ふは専ら往生經の行に依つて行ずるは是れを正行と名づく」とて此所に讀誦・觀察・禮拜・稱名・讚歎供養の五正行を提示せられてゐるのである。然らばこゝに往生經とは何かと云ふについて左の如く

(1) 觀經

(2) 三 經

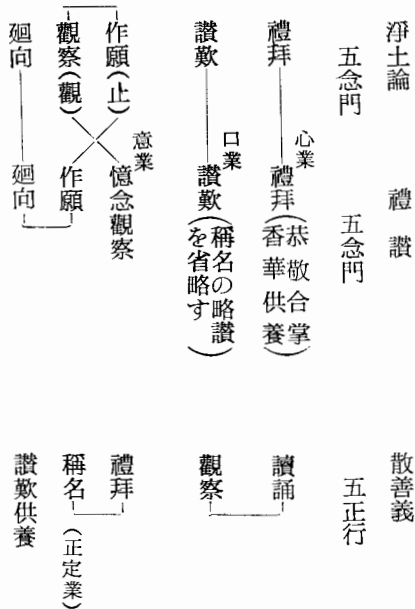
(3) 一般淨土經典

等の諸説あるも、今これを深信中に説示する點よりすれば勿論觀經を中心とするものなる事は明らかである。而して更に此の五正行中に於いて「一心に専ら彌陀の名號を念じて行住座臥に時節の久遠を問はず念々に捨てざるは是れを正定業と名づく彼の佛願に順ずるが故に若し讀誦等に依らば即ち名づけて助業と爲す」と述べて、先の禮讃で省略せられし稱名が將しく五正行中正定業の位置を占める事となつたのである。

而して今この五正行を先の五念門に對比するに、作願と廻向を没して、新しく讀誦・稱名・供養の三が加へられてゐるのである。即ちこゝに作願と廻向を没するはこれを廻向發願心釋へ納める意と見られるのであつて、又讀誦は觀察の前加行として加へられたものであり、これは禮拜が稱名の前加行なるに對比せられるものである。次に稱名は讚歎門中の略讃が別出せられしものなる事は既述の如くにして、又供養は禮讃に禮拜を「恭敬合掌香華供養禮拜」と詳釋せられてゐる點より窺へば、禮拜中の供養を別出せられしものと考へられるのである。斯くて此所に觀察と稱名を中心とする二つの體系が構成せられる事となつたのであつて、これ恐らく觀經の兩宗たる觀佛三昧と念佛三昧に擬せられしものと云ふ可く、又没せられし作願と廻向は觀經の體たる「一心廻願往生淨土」の廻願に擬せらるゝものと推考せられるのである。斯く觀じ來るとき天親の一心五念が大經の十八願の三心十念を基礎として設立せられしものと考へられるに對し、善導の五正行は全く觀經の説相によつて施設せられしものなる事が知り得られるのである。斯くて自利々他圓滿の菩薩道として提示せられし五念門は全く此所に廻向の利他行を没し去り、又その中心たりし止觀について止としての作願を没し、觀としての觀察は憶念觀察即ち觀佛三昧の觀に轉化せられ、而も稱名の正定業なるに對し助業の位置に置かれる事となり、此所に聖者の實踐法は全く凡夫相應の稱名中心の實踐法へと轉換せられるに至

つたのである。

因に上來五念門より五正行への轉化の次第を圖示すれば左の如くである。



終りに特に善導の禮讚及び散善義に於ける三心釋の取り扱ひについて再考するに、先づ禮讚に於いては至誠心釋と廻向發願心釋は特に自利眞實の一面を説示し、又深心釋は利他眞實の一面を説示せられてゐるのであつて、さればこの至誠心、廻向發願心の所修としての五念門の性格が如何なるものであるかが推知せられるのである。従つて宗祖は此の二釋は信卷に引かず化卷に一連に引用せられし所である。然るにこれが散善義に至ると至誠心釋・廻向發願心釋共に自利々他兩面より眞假に亘つて詳説せられてゐるのであつて、これを宗祖はその自利の文は先の禮讚の文と同様化卷に一連に引用せられてゐるのである。又深心釋には機法二種深心を擧げ更に就行・就人の立信、五正行の施設とこれを詳解せらるゝ所にして、而もこの深心については「深心と言ふは即ち是れ深信の心なり」とあり、こゝに深信

の心と云ふはこれ觀經の深心を大經十八願の信樂に同致せしむるものにして全く弘願の立場に立つものである。従つてその深心の所修としての五正行が如何なる性格のものであるかを知る可きである。斯くの如く善導の五念、五正に對する見解には其所に自から差別のありし事が推知せられるのである。

上述の如く天親の一心五念と善導の三心五念乃至三心五正の關係を見ると、其所に自からそれ／＼獨自の設意のありし事を知ると共に、それらの内面的關係に於いて五念門より五正行への展開過程が明確に跡附け得るのであつて、斯くてそこに止觀中心の聖者道より稱名中心の凡夫道への顯彰の跡を見るのである。而して此の善導の提示が聽て元祖の專修念佛となり、宗祖の正信念佛へと更に展開せられたのであるが、既述の如く五念・五正が一心乃至三心の安心と不離なる點を思ふ時、宗祖の正信念佛の提示こそ全くその眞意を得たるものであり、五念・五正の精華を發揚せられたものと云ふ可きであると思ふ。

註

- (1) 淨土論二丁左 (2) 論註下三丁右 (3) 高僧和讃曇鸞章第三十二首 (4) 淨土論二丁左 (5) 論註上一丁左
 (6) 論註上二十八丁左 (7) 論註下三十三丁右 (8) 高僧和讃曇鸞章第十一首 (9) 同第十四首 (10) 同第十五首
 (11) 銘文本七丁右 (12) 御自釋二十一丁左 (13) 同二十二丁左 (14) 論註上三十一丁左 (15) 淨土論一丁右
 (16) 同三丁左 (17) 論註下三十三丁右 (18) 禮讚三丁右 (19) 同一丁左 (20) 同二丁右 (21) 同一丁左 (22) 散善義八丁右
 (23) 同八丁右 (24) 散善義楷定記(顯意)第三卷(佛全三〇一頁) (25) 六要九・一丁左 (26) 六要八・二十九丁左 (27) 散善義四丁右